

防災減災・県土強靱化対策特別委員会会議記録

防災減災・県土強靱化対策特別委員長 御手洗 吉生

1 日時

令和7年12月3日（水） 午後3時35分から
午後4時46分まで

2 場所

第3委員会室

3 出席した委員の氏名

御手洗吉生、戸高賢史、榊田貢、穴見憲昭、岡野涼子、中野哲朗、宮成公一郎、
首藤健二郎、小川克己、御手洗朋宏、福崎智幸、成迫健児、原田孝司、堤栄三、
佐藤之則

4 出席した委員外議員の氏名

吉村尚久、高橋肇

5 出席した参考人の職・氏名

国立研究開発法人産業技術総合研究所
活断層・火山研究部門地震災害予測研究グループ主任研究員 吉見雅行

6 会議に付した事件の件名

別紙次第のとおり

7 会議の概要及び結果

- (1) 南海トラフ巨大地震について、参考人から意見聴取を行った。
- (2) 県外調査の実施を決定した。

8 その他必要な事項

なし

9 担当書記

政策調査課調査広報班	専門幹	佐藤達郎
政策調査課調査広報班	主事	徳丸花帆
政策調査課調査広報班	主事	瑞木彩乃
議事課議事調整班	主査	利根妙子

第3回防災減災・県土強靱化対策特別委員会

日時：令和7年12月3日（水）本会議終了後
場所：第3委員会室

< 次第 >

1 開 会

2 参考人からの意見聴取

3 その他

4 閉 会

会議の結果

御手洗（吉）委員長 これより、第3回防災減災・県土強靱化対策特別委員会を開催します。

本日は、委員外議員として吉村尚久議員と高橋議員が出席しています。

本日は、第1回目の参考人の意見聴取を行います。参考人として、国立研究開発法人産業技術総合研究所の吉見雅行主任研究員に御出席いただいています。吉見主任研究員の御略歴は、資料4ページに掲載しています。

発言いただく前に、私どもより自己紹介を行います。

まず、私から、大分県防災減災・県土強靱化対策特別委員会委員長の御手洗吉生です。吉見主任研究員には、大変御多忙の中、御出席いただき誠にありがとうございます。本日は、本委員会の検討テーマである南海トラフ巨大地震について、大分県の地震被害想定の見直し等に関する有識者会議の会長でもあるお立場から、御所見等をお聞かせいただきたいと思っております。

本日は、どうぞよろしく申し上げます。

それでは、本日出席の委員及び委員外議員より、お一人ずつ自己紹介をお願いします。

〔委員及び委員外議員自己紹介〕

御手洗（吉）委員長 これより、吉見主任研究員に、御発言いただきます。

吉見主任研究員 本日は、お招きいただきありがとうございます。私、吉見と申しまして、皆さんのお手元に略歴があるかと思いますが、ここで簡単に自己紹介させていただきます。

私自身は、略歴にあるように土木出身でございまして、そこから大学院の方では、地震研究所の方に土木の学生として在籍して、そこで博士を取ったというような者です。

現在は、国立研究開発法人の産業技術総合研究所と、前身でいうと昔の工業技術院にあたる場所ですが、その地質調査所という日本で一番古い研究所の、そのまま続いている組織ではあるんですけども、地質調査を主に担っている組織で働いております。

私自身は、土木だったり地震だったりということ専門としておりますので、そういった専門をいかしつつ、地質の方々と活断層を調べたりとか、そういう方々といろいろ調査をするということをしてまいりました。

大分県との関わりですが、2006年に、初めて私の方で大分平野の大規模な地下構造調査というのがありまして、そこで関わり始めました。その後、文部科学省の委託事業などでのプロジェクトも、この大分周辺、特に別府湾周辺でいろいろ調査させていただいたんですが、そのテーマ担当ということでさせていただいております。

今、御紹介ありましたけども、地震被害想定の見直し等に関する有識者会議につきましては、その前任の会長でありました京都大学の竹村先生の方から、吉見が引き継ぎというようなこともありまして、指名されるような形で引き継いでいるというような状況でございます。

大分には住んだことがないんですけども、もう20年来関わっているところですので、いろんなところも存じていると。ですから、大分とはかなり関わりがあるかなと思っております。

お手元に資料があると思いますけれども、南海トラフの巨大地震について、私の方から御説明をさせていただきます。

被害想定等の細かいところに関しましては、今回説明はしません。それから、県の方の防災想定の見直しに係る検討状況に関しましては、後日、防災部局の方から御説明があるということで、その部分に関しては私は説明はしません。

今日のお話の内容ですけれども、南海トラフの地震といいますと、いろいろ国の評価、あるいは国の防災想定など、ニュースをにぎわしている状況があると思うんですけども、そこに関して、皆様の頭の整理といいますか、こちらが理解している内容をお伝えするということが主眼としております。

お手元にもあると思うんですが、今年の3月、

中央防災会議のワーキンググループの方から、南海トラフの巨大地震対策検討ワーキンググループの報告書というものが出ておまして、そこで、南海トラフの地震が起きた場合に想定される最大の被害ですとか、それに対する対策をどうすればいいとか、課題とか、そういった報告書が出ております。

このうちの、私は、ここでいうと左上、青いところ、南海トラフ沿いの巨大地震の被害の特徴というのを生み出すに至るところの自然現象に関して、現在の考え方を御説明させていただきたいなと思っています。それから、あとは大分に特化したちょっと注視すべきことに関して、最後の方で触れさせていただきたいと思っています。

国の南海トラフ地震の想定、長期評価というんですけども、それは、南海トラフの地震とはなんぞやということに関して、主に理学者、理学研究者を中心とした地震調査委員会、これ、地震調査研究推進本部の地震調査委員会というものがあるんですけども、そこで、南海トラフの地震とは何ぞやというものをまとめたものを長期評価と呼びます。

その長期評価の内容を受けて、今度は防災想定に落とし込むために、中央防災会議の方でワーキンググループが組まれて、そこで、まずはどういった地震動になるとか、どういった揺れになるとか、どういった津波になるとか、それを計算するためのモデル化をする、あるいは計算手法を選定するというワーキンググループがまず一つあります。

今度、そこで、自然現象の地震動の計算、あるいは津波の計算結果を基に、その後には今度は被害想定をするワーキンググループがあって、それらを一体として報告書が出ているというような状況です。

今日の私の御説明は、特にその一番上、長期評価に関するところと、それから、南海トラフ巨大地震モデル、地震と津波のモデル化に関するところに関しまして、御説明させていただければと思います。

あと、下には、南海トラフの地震が我が国に

とってとても大切な地震というか、大変重要な地震であるということを示す例として、法律等も整備されているということは皆様御存じのところかと思えます。

では、あとは理科の授業みたいになっていくんですけども、簡単に説明させていただければと思います。

御覧になったことも皆さんある図だと思いますけれども、まず基本的なこととして、日本は複数のプレートに囲まれていると。そのうち、海から、太平洋プレートというのが東から、それからフィリピン海プレートというのは南から日本に向けて移動してきて、日本のところで沈み込むということをしております。

日本自体は、ほとんどユーラシアプレートというところに載っているんですけども、そことフィリピン海プレート、あるいは太平洋プレートが沈み込むところで大きな地震が起きるといのが、日本周辺の海溝型の地震の特徴であります。

これに関しては、手元の資料に動画は入っていないんですが、こちらで少し、国土地理院から昔出ていた動画ですけども、国土地理院が日本全国にGPSの観測点を配置して、日本列島の動きを捉えたものをうまく加工して、日本がこんなふうに縮んでいるよというのをアニメ化したものをここに載せております。

そうすると、何回か繰り返しますけれども、我々のいる大分の辺り、ここでいうと紀伊半島沖から四国沖にかけてのところが南海トラフと呼ばれるところになりまして、それで、四国、九州、それから中国地方がひしゃげているというのが分かるかと思えます。このひしゃげているものが元に戻るときに大きな地震を起こすというふうに理解されています。

このアニメーションでいうと、ちょっと北の方、東北の方にも多少注目していただきたいんですが、これは3.11の地震が起きるずっと前、1996年から1999年の12月までのデータを基に作った絵ですが、東北地方がぎゅっと絞られているのが見えると思います。この動きが反転することで、東日本の大震災が起こ

りました。

南海トラフの地震に関しては、今度はこちらですね。西日本がひしゃげている。その動きを戻すような動きが起きる、これが南海トラフの地震です。

では、今は地表から見ただけですけれども、南海トラフの地震を起こすフィリピン海プレートとユーラシアプレートの間はどのような場所にあるかというのを、どういう情報を基に算定しているかという例をお見せします。

今、このアニメーションで見ているのは、防災科学技術研究所が全国で観測した地震計のデータを基に、小さな地震がどこで起きているか、震源の位置をプロットしたもので、赤い色が浅い地震、どんどん寒色系、寒い色、青色になるに従って深くなっていくというような絵ですけれども、ちょうどこんな感じです。

この今動かしている3次元のプロットですと、今見えているのは東北から東、太平洋プレートが沈み込んでいるような面になるんですけども、深い方の地震というのは、ある面の上に並ぶと。これは何かというと、それが正にプレートの境界。ここでいうと、太平洋プレートとユーラシアプレートの境界というのがこういうところにあると。そこでこすれて、小さな地震も起きるわけです。

同じように、ちょっと見づらいんですが、こちら、九州の下に沈む、この辺見えますかね。この辺って、ちょっと左の方に見えている点群があるんですけども、それがフィリピン海プレートが沈んでいるものです。

このようにして、プレートの場所、地下での場所というのも、もうかなりの精度で把握されているという状況になっています。

こうしたフィリピン海プレート、南海トラフに着目しますと、フィリピン海プレートが北西に向かって沈み込むことによって何が起きているかという話ですが、これはグーグルマップから持ってきた海底地形の絵になっています。そうすると、右下、ちょうど私が今カーソルを入れている、このしわくちゃになっているところとなっていないところの境界の場所が、お手元

の図でも分かると思いますが、つるつるの場所としわくちゃになっているところの境界が、海が一番深くなっている南海トラフと呼ばれる場所です。トラフというのは、深さ6千メートルよりも浅い海溝のことです。なので海溝だと思っていただければ構いません。

その南海トラフよりも北側の地面が、ぐしゃぐしゃになっているというのが見てとれるかと思えます。これはなぜかということ、フィリピン海プレートが、その海溝軸で今度斜めにどんどん沈み込んでいくわけですけれども、そのときに陸のプレートと一緒にくっついて沈み込んでしまうためにひしゃげるわけです。もし二つのプレートがつるつるに、プレートだけが勝手に沈み込むのであれば、上は何も変形しないので、こういったしわは起きないんですね。こういうしわが出ているということは、海のプレートが陸のプレートも一緒にくっついて沈み込んで、そのためにひずんでいるということを意味しています。その積み重ねがこの海底の地形になっています。

さらに、一緒に沈み込んでいるんですけど、あるとき耐え切れなくなって、こういったところが南海トラフの地震の震源域と今されている場所ですけども、これ、よく見る、中学校の教科書等で見る絵でいうと、海のプレートが陸のプレートの下に沈み込んで、ぎゅっとひずみがたまって、あるとき戻るときに大地震を起こすということですけども、その領域が面的に広がっているのがこの南海トラフというところにあたります。ここはすごく基本的なところを説明しました。

それでは、その南海トラフの地震、これまでどんなものが起きてきたか、今何が分かっているかというお話を簡単にしたいと思います。

左側の絵ですけれども、これ、地震調査研究推進本部の方から出ている図です。南海トラフ地震の震源域を、この赤で囲われている場所ですけども、そこを六つに区分して、そのどこが、過去、大きな地震を起こしたかというのを、縦を年代で、西暦、横軸を場所ごとにプロットした絵が左側に示してある図です。

一番上を見ていただくと、684白鳳地震というのが書いてあるかと思えます。それで、白鳳地震の場合は、左側に赤い棒がもっと伸びていて、この赤い棒というのは、ちょうど南海地震、紀伊半島沖から四国沖にかけての領域が確実に動いたであろう地震と認識されているということです。

白鳳地震のところ、右側に黄色い点々がありますけども、これに関しては、動いたかもしれないけどよく分からないというふうになっているところです。そうしますと、これは何を示しているかという、南海トラフの地震の繰り返しを示しています。

それから、途中にいろいろ数字が書いてありますけども、このバーのところ、数字がいろいろ203とか212とか書いてありますが、これは、この二つ、分かっている地震の起きた間隔、年を表しています。これを見て、どんどん近年の、下に行くと近年に来るわけですけども、近年の方に来ると、大体90年から150年の間隔でこれまで南海トラフの地震が起きたんだということを理解することができるかと思えます。

昔の南海トラフの地震をどうやって判別するかなんですけれども、特に京都周辺には、古文書、日記をずっと残しているお寺とかがありまして、そういうところの史料などを探すと、いついつ大きな地震が起きたとか、どこどこで被害が起きたとか、そういう情報がまばらにいろんなところで見つかる。そういうものを総合してだんだん分かってきたのが、この年代と、それから、それが南海トラフの地震だというふうにコンセンサスがほとんど取れてきたのがこのリストに載っているものです。

特徴は、強い揺れと大津波ということになります。

この左側に示す絵のうち、揺れの強さの大体の分布ですとか津波の高さの分布がよく分かっているのは、1707年の宝永地震以降の3回の地震に限られます。それは、1707年の宝永地震と、1854年の安政東海、安政南海地震。これは、30時間離れて別々に起きた地震。

それから、昭和の東南海、南海地震に関しては、2年間の間を置いて別々に起きた地震ということになります。

参考までにですけれども、684年の白鳳地震という日本で起きた年代が分かっている一番古い南海トラフの地震ですけど、なぜ分かっているかというのをちょっとお見せします。

それが次にあるものです。皆様、御存じだと思いますけども、日本書紀という史料がありまして、そこに南海トラフの地震が起きたと書いてあります。それを縦文字ではなくて横に書いてしまっているんですが、こういったものがあります。この天武天皇の13年の冬10月というような記事で、ここにちょっと私が赤い字で書いたのが、地震だというのが分かりやすいところですけども、大地震が起きたと。国を挙げて、男女、人々が東西動いたと、皆さん慌てたと。山は崩れて川は湧いたと。それから、いろいろ建物も全部壊れて、壊れた数は数知れずというところが赤い字で書いてあります。

さらに、伊予の温泉が出なくなったと。これは、道後温泉のお湯が枯れたと。さらに、土佐の国では田んぼが海になった、地盤沈降が起きたと。

それから、さらにちょっと行くと、海が沸き立って、調を運ぶ船、税の一つとして物を納める時代ですけども、それを運ぶ船が多数失われましたということが書いてあります。

これを読むと、西暦684年に大地震、それから道後温泉の湯が出ない、それから土佐で、高知で地盤沈降になった、それから津波が起きたということが分かりますので、これは南海トラフの地震だと分かるわけです。

このような積み重ね、ほかの地震もそういった積み重ねがあつて年代と場所が大体分かってきたというような状況になっています。

ここで、次にお見せするのは過去3回です。この三つの地震のときの津波の高さ分布が、これは国の資料、中央防災会議の資料に出ていますので、それを切り取って皆様にお見せしております。

細かく説明するのはちょっと時間が足りなく

なるんですが、大分のところだけ特出ししたのを、一応私の方で付記しております、昭和南海地震、それから安政南海地震のときは佐伯で1メートルから2メートル程度の津波で済んでいると。ただ、一方、1707年の宝永地震のときには、佐伯市の米水津で10メートルを超える津波が襲ったということが史料から推定されているということになります。

これは何が言いたいかという、それぞれ南海地震だ、南海トラフの地震だといっても、そのときそのときで津波の高さも分布も違うことがありますよということです。

次に、今度は揺れの、震度の分布を示します。左側にある昭和の南海については、これは気象庁の、気象台がもうありますので、その震度を内挿したデータになっているようです。

右側の方は、いろいろ色が付いた点々があるわけですが、これは、それぞれどここのまちで建物がどれだけ壊れたとか、壁が崩れたとか、そういったそれぞれの被害状況を記した日記、記録等を基に、今の震度に換算するといくつというのを書いたような絵になっています。

ちょっと注意ですが、左の図ですとオレンジ色が震度5ですが、右側の方ではオレンジ色は震度6になっています。ちょっと色が違います。

ただ、御説明しますが、昭和南海地震と安政南海地震のときには、大分市でいうとどちらも震度5程度の揺れが推定されていると。一方、1707年の宝永地震に関しては、大分市のあたりは震度6になっている、かなり強い揺れになっていると。これも、揺れに関しても、南海トラフの地震と一言で言っても違いがありますよということ、過去の地震からも分かりますよということを御説明させていただきます。

それで、今度本題になるわけですが、じゃ、次の南海トラフの地震はどうなんだという話になります。

ここで、これまで過去に何度も中央防災会議の方で、地震動の算定、それから防災想定等が行われてきたわけですが、ここにお示したのは、今年出た中央防災会議の資料から、震度分布と、それから津波高のうち1ケースを持

ってきたものです。

右上、ちょっとまた色味が分かりにくいことはあるんですけども、赤っぽいほど揺れが強いと。大分だと震度6強になる場所も少しあると。大分で色が少し目立つのは震度6弱で、そのうちごく僅かに震度6強の場所もあるというような想定震度分布が出されています。

それから、下の図ですと、これは津波高を示した、これも色味で示されているから少し分かりにくいかもしれませんが、大分県の南東部では、10メートルを超える、十数メートルから20いかないぐらいの津波高が計算されているというような状況で、これを基に被害分布等が推定されています。

大分県が今やろうとしている津波等の計算でも、こういった似たような結果が出てくかなと私は考えているところであります。

私の今日の説明は、この震度分布等を推定する前提条件は大丈夫かという話をしたいと思っています。

その前に、ここでまたモニターの方を見ていただきたいんですけども、これは、今、東京大学地震研所長をやっている古村先生が一般公開用に公開している計算結果の動画です。南海トラフの地震が起きたら、日本全国が揺れますよ、揺れがどんどん伝わっていきますよという図です。

紀伊半島沖から破壊がまず東に伝わって、その後にもう一回破壊が東海地域で起きて、次に、もう一回紀伊半島沖から今度は西側に破壊が伝わって、大分が揺れると。大分はよく揺れていると思うんですが、大分がよく揺れるのは、軟らかい地盤が結構厚く存在するから、そういうものも考慮した計算結果がこういうふうに表示されています。

実は、国の想定でされている計算よりも、こちらの方がちょっと高度な計算をしているので、防災想定にこれがそのまま取り入れられているわけじゃないんですが、イメージ図として皆様にも今お見せしました。

皆様、御記憶の方もいるかと思うんですが、実は南海トラフの地震に関しては、昔から防災

想定されています。その一番最初だと思うんですが、2001年に公表された防災想定の際の絵を持ってきました。

これを見ますと、まず右側の震度分布を見ていただきたいんですが、2001年の段階では、大分の揺れは最大でも震度5強、6はない、ほとんどない揺れだったんです。ただ、今の2013年、それから2025年の想定だと、大分だと震度6強にもなるよと。この違いは何なんだ。

それから、津波の高さに関しても、2001年の段階だと、場所によっては5メートルを超えるけれども、10メートル超とかそういうような計算結果は示されていなかったと思いますが、今はもっともって増えています。

この背景について説明します。結論からいうと、震源域を大きくしたということがあります。

この図ですと、黄色く囲われているところが、これが2003年、2011年より前までの防災想定で考慮されていた南海トラフの地震の震源域です。深さ10キロメートルから30キロメートルぐらいまでのプレート境界をモデル化して、そこで地震が起こる。それから、そこが動いて、回転面の変動が起きて津波が起きるといような計算をしていました。

ところが、2011年より後、東北地方太平洋沖地震の教訓を考慮して、この図でいうと、まず太い黒で囲まれている領域が、これが強い揺れを起こす領域として広がって設定された。大分に関するところだと、九州の沖まで震源域が広がっているということが大きな変化かなと思います。

もう一つ、津波に関しては、この黒いところに加えて、ピンクで色付けされているところ。これはプレート境界でも浅いところ、海溝の沈み込んだ場所から深さ10キロメートルまでの場所については、津波を起こす場所として考慮しましょう。これも3.11の教訓となっています。それがあって、大分に関しては地震動が強くなっていますし、それから、全体的に津波の大きさも高くなっています。

ここで皆さんにお示しするのは、もう一つあ

りますね。この震源域を大きくするにあたって、どういった考えだったかという、南海トラフ巨大地震の被害想定第二次報告のところに、大臣記者会見資料が添えられていて、そこで、東日本大震災の教訓を大規模地震や津波対策に取り入れるというのを基本的なスタンスにするということが書いてあります。あとは、そうした東日本大震災の教訓で、想定外を避けたものを想定して、その後の被害想定も全部つなげていくというようなことが書いてあります。

じゃ、それは何だというのを皆さんにお話しします。そうすると、2011年より前、3.11の前に何を考えていたかということを中心に御説明しないといけないかもしれません。ここにお示ししている二つの図、ちょっと複雑ですが、今から説明します。

まず、左は何かということですが、左で色付けされているものと、数字が1968とか年代が書いてありますけれども、これは、この東北の沖で、その2011年より前までに起きた大きな、マグニチュード8クラス、7の後半から8クラスの地震の震源域、よく滑った場所です。大きく滑って地震動なり津波なりを起こした場所をプロットした絵になっています。

2011年より前は、この領域ではこのぐらい、それぞれの色別ですね。例えば、1968のAになりますけど、この紫のところは地震を起こしましたよ。それから、1968年の十勝沖地震だと、このちょっと大きめの青いところが二つ主に滑って、大きな地震を起こしましたよということしか分かっていませんでした。

これを見て何を考えていたかという、地震を起こす場所は、こういった特定の、プレート境界のうちでも特定の小さなパッチ、ある程度小さなパッチに限られていて、それ以外の場所は地震を起こさないんだというのが定説になっていました。

ただ、この右側に示す図は何かというと、これは赤くなっているところは、最初の方にアニメーションで見せた、陸が変形していますよね、ぎゅっと縮んでいますとなっている絵のデータを基に、じゃ、どこがどれだけくっついてい

かというのを逆算した結果を示したものがこの右側の図になっています。

赤い色が濃ければ濃いほど、よくくっついていると。陸のプレートと海のプレートが一緒にくっついて動いている。ですから、それが反発するときには地震を起こすはず、今でいうとそう考える場所ですが、そういう場所が示されています。

そうすると、右の絵と左の絵を見て、全然大きさが違うんですね。固まっている大きさが違う。じゃ、この違いは何だと思っていたかというと、左のように、強い地震動を起こす、一気に滑る場所というのはこういう場所に限られていて、それ以外の場所は、何かよく分からないけど、いつかつるつる滑って、こういったくっついているものが解消されるんだと考えて納得していたわけです。

たまるひずみの、ここでいうと4割が地震で解放されて、6割は何か知らないけどずるずると戻るような動きで解消されるというふうに考えていたのが2011年より前の状況。そう考えていなかった方もいるかもしれませんが、この考えが主流でした。

じゃ、3.11で何が起きたかなんですが、ここで左側に示す赤い図は、さきほどのこの右側の図と同じだと思ってください。くっついている場所の分布。右側は何かといいますと、東日本大震災のときに実際に滑って、プレート境界がくっついていたのが剥がれてぎゅっと戻って、地震を起こした場所の等高線図、コンター図になっています。単位はメートルですので、25メートル以上滑ったと、滑り戻ったというようなものになります。

この両者の分布を見てみると、左側で赤の色が濃い場所と、右側の山が高い、よくくっついている場所、コンターの大きいところ、いっぱい滑った場所というのは大体同じ場所になっているんですね。要は、くっついていた場所が戻るという現象が起きただけです。

もう一度繰り返すと、2011年より前はくっついているのは分かっていたけれども、その全部が地震で解消されるわけではなくて、一部

は地震だけど、それ以外の地震じゃない動きで解消されると思っていたので、この東北で起きる地震の最大規模はせいぜいマグニチュード8ちょっとですよと思っていたわけです。

ですが、実際に起きたのは、くっついているのが分かっていた場所は全部一気に戻ってしまった。ですから、今まで観測していた地震よりも一回り大きいものこそが本質だったということが分かったんですね。

ですから、プレートが沈み込んでいて、くっついているのが分かっている場所は全部地震で解放されると考えた方がいいというのが太平洋沖地震の、3.11の教訓です。ですから、思い込みはやめましょうと。観測事実はちゃんと素直に受け取りましょうというのが教訓のうちの一つ。

それを頭に入れて、冒頭で見せた、日本がひずんでいるという情報から逆算したプレートのくっついている場所を示した図が、この今示している絵になりますが、赤いところがくっついている場所です。このデータは2000年までのデータですので、3.11も入っていないですし、ほかの地震も入っていませんが、そうすると、南海トラフのところを見ていただくと真っ赤に塗り潰されています。こういうところは、陸のプレートと海のプレートが今一体となっぎゅうぎゅう沈み込んでいる場所だと逆算できている場所です。これを見ると、このくっついている場所は全部震源にすべきだという判断になると。それで震源域が大きくなりました。

このデータですが、今お示ししているデータは陸のデータしか使っていないんですが、最近、海上保安庁が、海の底にもGPSに相当する、地面の動きを長期間にわたって捉えられる装置を付けて観測してまして、そのデータもくっつけて、今度逆算したのが右側にあります。

やはり同じように、この南海トラフの領域では、かなり広い領域がぐっとくっついていると。ぴったりくっついて、海のプレートと陸のプレートがくっついたまま沈み込んで、いつか地震を起こすであろうということが想定されるということになっています。これが教訓その1です

ね。

もう一つの教訓としては、今度は津波の波源域の追加といって、浅いところも大きく滑りますというのを追加しています。これは何かというと、さきほどの震源域は大きくなりましたという図の中では、ピンクの網かけになっている部分です。津波の計算のときだけ、ここも動かして津波を起こすようにしています。

これは、ちょっと細かい話になるんですが、さきほど2枚前、これで見せた図もそうですし、この海上保安庁の図もそうですが、南海トラフに近いところ、トラフの軸といいますけど、沈み込んでいる一番先端に近いところというのは色が抜けています。要は、逆算する限りはくっついていようには見えない場所、つまり、ひずみがたまらない場所、たまっていないかもしれない場所ですが、そういった場所も実は地震のときに大きく動く可能性があって、それが動く、しかも津波の高さを劇的に増加させるということになってしまうと。

3. 11のときには震源域も大きかったんですが、大きい動きで波長の長い津波が起きたんですが、さらにこの海溝に近いところの浅いところが大きく動くことによって、波長がちょっと短いけれども、非常に高い津波が来ました。水の量は多くないんですけども、ただ、すごく高い波になる、高い津波を起こさせる領域としてこういうものも想定しようというのが教訓その2になっています。

実際に、中央防災会議が2012年、それから2025年で計算している津波のモデルでは、津波のときだけはこの浅いところも大きく動かす、超大滑りと書いてありますけれども、そういうものを設定するという事になったようです。大滑りとか超大滑りとか書いてありますけれども、それはなぜ設定しているかという、3. 11の教訓ということになります。

ということで、3. 11の前後で想定震源域が大きくなり、さらに津波に関しては、浅い方も滑らすことによって、最終的にそれより前の防災想定用の地震動だったり津波高よりはるかに高いものを今想定して対策しようという

ことが言われているわけです。

これは全て過去に起きたかどうかは分からないけれども、少なくとも2011年の3. 11の教訓をいかすと、こういうことを設定せざるを得ないと思われるものと御理解いただければと思います。

じゃ、津波に関して、大きな津波というのは本当に発生するののかという疑問をお持ちだと思うんですが、それを説明する、その答えとなる証拠の一つが大分で見ついているという話を少しさせていただきます。

大分の佐伯の米水津の辺りよりちょっと南に、今、龍神池と書いていますけど、名前のない池がありました。これは、この左側の下は地形図になっているんですが、何を示しているかというと、太平洋に面してはいるんですけども、池と太平洋の間に砂丘があって、この砂丘を越えない限り津波は入ってこないような池です。そこで、基本的には泥などがたまる環境なんですけど、大きな津波のときだけ砂が入ってくると。そうしたものがみついています。

これは高知大学の岡村先生などが研究されていたんですけども、その結果ですと、大体300年から400年に1回大きな津波がこの龍神池に入って、砂をためるということが分かっています。

ですので、それぞれが南海トラフの地震に対応すると、南海トラフの地震の中でも特に津波が大きいものというのは、何百年かに1回起きてきたということを示していることになります。ということが、まず今日のメインのところでございます。

続いて、少しだけお話しさせていただきますが、地震発生確率についてお気にされている方がいるということで、簡単に説明させていただきます。

今年の9月に地震本部の方から、この南海トラフの地震の長期評価の第二版の一部改訂というのが出まして、そこで南海トラフの地震の発生確率が多少変更になったというようなマスコミ報道等もあったかと思います。

これは何かということ、ちょっと簡単に私

のコメントをさせていただきますが、今までの知見と大きな違いはないと認識していただければと思います。この右上に示しています表のうち、網かけしているものは、これは今までの第二版のもともとの評価で出されていたデータで、今年1月の時点で80%程度の発生確率があるよということだけが示されていたと。

一部改訂になって、それが2種類示されて、片方は60から90%、もう片方は20から50%で二つありますというような話が出てきたんですが、実はこの第二版の一部改訂も、確率の低いほう、このBPTモデルと書いています。これはばらつき予想、地震を起こすときには、いろいろな要因で起きる臨界点がばらつくでしょうと。臨界点がばらついたり、それまでの過程がばらついたりするので、そういった揺らぎを考えることをBPTといいます。BROWNIAN PASSAGE TIMEというんですけど、要はばらついているという意味です。そういうばらつきを想定したモデルというのは、これは実は第二版のとき、2013年にも実は記載されていて、表にはなっていないだけですので、これは新しい情報ではないです。

あと、もう一つ上の滑り量依存BPTモデルといって、これは新しく出てきたんですが、何かSSD-BPTモデルという何かよく分からん、初めて聞く名前になっているモデルがありますが、これは何かというと、かいつまんで言って、次のスライドに行きます。

南海トラフの地震のときに、室戸岬の方の付け根というか中間部にある室津港という港がありまして、そこで、宝永地震、安政地震、それから昭和の地震、三つの地震のときに地盤が隆起した量がある論文で出されています。これまでは、論文に書かれているそれぞれの地震での隆起した量、1.9メートルとか1.2メートルとかいろいろあるんですが、それぞれの量をそのまま用いてきているような計算をしていたんですが、最近になって、その隆起量のデータというのは信頼性に乏しいものもありますよねという論文が出てきたと。そしたら、昔のデータは信用度が低いという扱いにして、ばらつきを

想定して計算してみた。そしたら、いろんな確率が出てきましたということだけです。

ですので、本質的には今まで出ていたデータとあまり変わらない。何が言いたいかといいますと、やはり宝永地震のときには大きく隆起して、安政のときにもある程度隆起して、昭和の地震のときにも室戸岬のところはある程度隆起して、その隆起量と滑り量の関係を見ていくと、次の地震が差し迫っているという評価になることは変わりないです。ですから、ちょっと数字としては違うように見えますけれども、今までの評価とそう大きく変わるものではないというふうに認識していただければなと思います。

大事なことは、やはり南海トラフの地震はどんどん差し迫っていると。今すぐ起きるとは私は思っていないですけども、少なくとも10年たてば前の地震から90年になるわけで、20年たてば100年になるわけで、今までの繰り返し間隔から見ると、そろそろかなと思うのが皆さん考えるところかなというふうに思います。

最後ですが、大分県で注意すべきことを二つ指摘させていただきます。

もちろん、リアス海岸での高い津波、それから強い地震動に関しては、それを見て対策することは最優先なんですけども、それ以外に関して、2点だけ私の方から述べさせていただきます。

まず一つです。冒頭でもちょっとお話ししましたが、これまでの南海トラフの地震というのは、90年から150年、あるいは古い方だと二百何十年間隔で起きていますが、ここで着目するのは、それぞれがどういう起こり方をしたかということなんです。

1707年の宝永地震、それから887年の仁和地震に関しては、全ての領域、ある程度広い領域が一気に破壊した地震であろうというふうに思われています。そういう地震もあれば、昭和の地震、それから安政の地震、それから正平の地震のように、まず東が、東海地震、東南海地震が起きて、その後南海地震、西が起きるというようなパターンも多いわけですね。次の地震がどっちのパターンになるかは分からな

いんですが、もし東が先に起きて西が後に起きることになると、次、地震が来る、もうすぐ地震が来ることが分かっているのという状況に陥る。それが結構大きな問題になったなというふうに思います。

しかも、過去の例を見ると、昭和の場合は約2年間の間隔があります。一方、安政それから正平に関しては、30時間だったり12時間だったりなので、前の地震が起きて一日二日のうちに起きることが起きています。1096年永長、1099年康和という、これも2年以上の間隔があるということで、次の地震が分かれて起きるときに、どのぐらいの時間間隔で起きるかが分からないというような状況になります。

それぞれが別に起きたときに、要は、全部が一気に壊れたときと半分が壊れたときで、半分が壊れたときの方が揺れが小さくなればいいんですけども、どうもそうでもない。

ここに示すのは、左側は、国の想定で全部が一気に割れたときの震度分布と、西側だけが割れたときの震度分布を持ってきていますが、これだと大分の揺れは一緒です。

それから、津波の高さに関しては、これは右側ですけども、全部が割れたときの方が若干高くはなるんですけども、西側だけが割れたケースでもかなりの高さの津波が来るということで、大分にとっては半割れも全割れも、揺れ、それから津波に関しては大きくは変わらない。変わるの、もう来ると分かっているが待たなければいけない、そういう状況に陥るといふところが大きく違うということになります。

なぜ私がこの話をするかということ、皆さん御存じだと思いますが、南海トラフの地震については臨時情報を発令するということが起きていまして、今年の8月には巨大地震注意というのが出たと思うんですが、この半割れのケースは確実に巨大地震警戒というようなものが出ます。今年経験したのは注意だったと思うんですが、警戒というのが出ます。

そうすると、何をすべきかという話なんですけど、まずは一つ、東側の地震が先に起きている

ので、大津波警報は恐らく出ていると、皆さん避難しているという状況です。大津波警報が出て皆さん避難している間に次の地震が起きれば、まだ事前避難が良かったねということになるんですが、それが2年後かもしれない、あるいは2週間後かもしれない、1か月後かもしれない、誰も知らないということがありますので、その間をどうするかというのは、今後、次に本当に地震が差し迫るまでには何とかしていかなきゃいけない大きな課題かなと、大分では大きな課題かなというふうに私は考える次第です。これが第1点です。

もう一つは、少し専門的になるんですが、長周期地震動という問題があります。これは、大きな地震のときにだけ特異に発生するゆっくりした大揺れのことです。

というのは、地震のときに発生する地震の揺れというのは、マグニチュードが大きくなればなるほど長い周期の成分も多く含まれるようになっていきます。しかも、長い周期、ゆっくり揺れる波というのは遠くまで伝わって、なかなか減衰しない、弱くならないという性質を持っています。ですから、大きな地震が起きると、長い周期の構造物というのは結構警戒しなければなりません。

さらに大分の場合、特に別府湾周辺の場合は、軟らかい地層がかなり厚くたまっていますので、長周期の揺れが増幅されてしまう、共振を起こして増幅してしまうということがありますので注意です。

実は私、こういうことを2006年の調査からやっているんですが、ここにお示ししていますのは、別府湾の岩盤がどれぐらい深いかというのを示した鳥瞰図のようなものを下に入れておりましたが、今我々がいるところだと、岩盤まで2キロメートルちょっと、2キロメートル半ぐらい行かないと岩盤に到達しない。それより浅いところは、火山の砕石物とか、あと堆積層がたまっている比較的軟らかい地盤があります。これが、別府湾全体がおわんのような形をしていまして、ここで長い揺れが増幅されるというようなことになっていきます。

です。ふだんは余りにしなくていい高層ビルとか免震建物とか、それから石油タンク等ありますけども、そういうものは南海トラフの地震に備えて要警戒だというふうに私は考えています。

ちょっと実測なんです。私、大分に1か所地震計を置いてまして、そこで去年と今年に比較的大きな地震が起きたときの記録をちょっとお見せして御説明します。

これは今年の1月に日向灘で起きたマグニチュード6.6の地震でして、このぐにゃぐにゃしているのは何かというと、横軸が時間。ここでいうと250秒ですから、4分間ぐらいの波形が描いてあります。このがしゃがしゃしているのが地面が揺れているのを示していますが、この後ろの方ですね。マニアックで申し訳ないんですが、後ろの方だと、ぎざぎざが少し幅が広がって見えていると思うんですね。ここは周期2.5秒ぐらいの揺れが比較的大きく見えています。マグニチュード6.6だからいいんですが、これが南海トラフの地震のようにマグニチュード9ぐらいになると、この周期の揺れはもっと大きくなるでしょうし、さらに長い周期の揺れももっとも大きく含まれるようになってきて、そういうものが大分で増幅されるということがもう分かっています。

これは、今度は8月8日の日向灘のマグニチュード7.1の地震ですが、やはり同じように周期2.5秒ぐらいの揺れが大きくなってまして、ちょうど免震建物の免震周期に合うので、怖いなというふうに私自身は思っているところです。ちょっと最後はマニアックでしたが。

今までお話ししてきたんですが、最後に私の言いたいことを御説明します。南海トラフの地震に向けた心構え、大事だと思うことをあげます。

次の南海トラフの地震の大きさを知る人は誰もいません。それから、いつ起こるかも誰も知らない。さらに、こういった国やこれから県が出すような想定が、ちょっと大き過ぎるんじゃないのというふうに思う、そういう感想を持つ方も中にはいると思うんですが、大き過ぎると

いうふうに感じる根拠は、実は科学的には存在しないんですね。これは認知バイアスといいます。この三つのことを頭に置いておくべきだと思います。

さらに一つ、私は土木の出身ですから、言いたいこととしては、対策をすれば確実に被害を小さくできますので、いつ起こるか、どのぐらいの大きさかは分からないけれども、とにかく対策するということが大事だということを最後に皆様にお伝えして、私の話を終わりたいと思います。

御清聴ありがとうございました。（拍手）

御手洗（吉）委員長 ありがとうございました。以上で説明は終わりました。これより意見交換に入ります。まず、委員の皆さんで発言されたい方は挙手をお願いします。

堤委員 どうも今日はありがとうございました。堤でございます。

今話を聞いて、日常から我々がしておかなければならない対策、地面が揺れて、長期振動で液状化されて、対策も立てようがないなと思いつながら聞いていたんですね。

家とすれば、天井と洋服だんすなんか、突っかい棒しているんだけど、その程度ぐらいしか我々としてはできないんですね。そうした場合は、どう根本的にやればいいんですか。

吉見主任研究員 対策のフェーズっていくつかあると思ひまして、今おっしゃったのは、今住んでおられる今の状況の家で何をすればよいかという話だと思うんです。そうすると、今の状況を変えるには、家具の固定ですとか、あとは、例えば揺れたときに逃げられるように履物を近くに置いておくとか、そうしたものしかできないと思うんです。

ただ、もうちょっと長期的に考えると、今、耐震設計等は、もうこういった大きな揺れにも対応できるようなものを造る技術がありますから、そうしたものにどんどん置き換えていくということになるかなと思います。

ですので、今できることと長期的にやらなければならないことは別でありまして、長期的にはやはり耐震性の高いものに置き換えていくと

いう行動がいいかなと私は思います。

短期的には、今できることとしては当然家具の固定であったり、それから、避難先をどうしようとか、避難するとき困らないようにしようとか、そうした心構えがとても大事だと思います。

堤委員 私が今住んでいるところは、砂地を埋立てしているところなんだけど、結局、さっきの長期振動の場合、液状化現象というのが出てきますよね。いくら頑丈な建物にしても、基礎が、つまり地中まで杭を打っているわけではありませんから、その前には対策をいろいろしたとしても、結局潰れちゃうのかなという思いが強いですけど、そこら辺、しようがないですよ。

吉見主任研究員 今回、私は液状化を入れていないんですけども、確かに大きな地震になると揺れがすごく長く続くと。液状化を起こすには、強い揺れも大事なんですけれども、それが長く続くということがとても大事なので、おっしゃられるとおりに、液状化を起こす可能性のある地盤がこの南海トラフの地震のようなすごく強く長い揺れに襲われると、ふだん思ってもいないようなところまで液状化してしまうということが起こるのかなと思います。

ただ、じゃ、それで液状化を起こして家が潰れるかという、私は能登に行ったりとかいろいろしていますが、液状化で潰れているというものはないです。むしろ、液状化だと沈んでしまうということがありますが、建物自体は維持されているものをよく見ます。

ただ、それも条件がありまして、きちんと基礎がしっかり全部くっついていると。昔風の建物のように、柱の先にだけしか石がないような状況だとがたがたになって、不等沈下というんですけど、それで建物がゆがんでしまっただけの場合もあると思うんですが、基礎をしっかりしておく、全体が傾いたり沈んだりとかいうことはあっても、家が潰れて、それで亡くなってしまうと、そういうことはさほど心配しなくていいのかなと、被災地を見てきた人間としては思います。

宮成委員 先週、大分の方もちょっと地震があったんですけども、エリアメールとかが鳴っても、もうそのときには揺れていたりと。それで、本当のことを言って、言いづらいかもしれませんが、先生方、こんな研究をされていたら、少し早めに、もしかしたら1週間後ぐらいとか3日後ぐらいに来るとか、そんなことを感じたことってやっぱりあるんですか。

吉見主任研究員 御質疑ありがとうございます。

私も皆さんと一緒にです。やはりいつ地震が来るか分からないですし、それから、そういったエリアメールで、来てびっくりすると。もちろん震源域を見るときには、揺れてからエリアメールが来て、役に立たないなというふうに感じたりするというのとは一緒でございます。

ですので、最後に述べたように、いつ地震が来るか分かっている人というのは本当にいないのは、本当に本当です。

戸高副委員長 せっかくなので、一言。

20年ぐらい大分に関わっているということなんですけども、活断層というものがやっぱりあると思うし、九州でいえば、活断層による大地震とか、西方沖とかも、確かあれは警固断層だったですか、ありました。今回、プレートによる発生確率も含めて研究を行ったんですけど、活断層とこのプレートの関係とか、それと活断層の発生確率とか、そういう研究はどういうふうにされているのか。

吉見主任研究員 ありがとうございます。

実は私、活断層の方が専門に近いです。今日、南海トラフの話をさせていただいたのは、私もこういった地震に携わる者としての、皆さんより少し知っていることがあるので御説明させていただいたんですが、実は活断層の方が専門に近いです。

それで、まず一つ目の質問、プレート境界の地震と活断層の地震との関係ということでございますが、定量的にはよく分かっていないというのが現状ではあります。

ただ、かつて、石橋先生ですか、兵庫県南部地震が起きたときに、西日本は活動期に入ったぞというようなことが言われていたと思うんで

すが、あれは正しいのかなというふうに私は思います。つまり、さきほど最初にお見せしたように、ひずみがたまっているわけですね。たまっている、大きな地震が起きる前というのは一番ひずみがたまっている状況になっているはずで、そうすると、それぞれの活断層にも大きな力が働いているはずですから、活断層の地震も起こりやすいと思った方がよいと。

実際、3.11の地震、2011年の地震が起きる前に東北でどんな地震が起きていたかというのを考えますと、2004年の新潟の中越地震、それから2007年の中越沖地震、それから、ちょっと目立たないですけど、2003年に宮城県でマグニチュード6.3ぐらいの地震が起きていますし、それから2008年に岩手・宮城の地震というのが起きています。そういうものがかなり頻発したんです。2011年以降は、もうほとんどないと。1回山形で地震がありましたけど、ほとんど起きていないという状況になっていますので、やはり大きな地震の前は内陸の地震も活性化すると考えた方がよいと。

そういうことは、さきほど御指摘になられたように、大分県周辺にも活断層ってかなり多くありまして、それも今回防災想定で入れていくわけなんですけれども、それらに関しても警戒を怠ってはならないと言わざるを得ないかなと思います。

特に、ちょうど今、機会なので申しますけれども、大分市の直下、それから別府にかけて、昔、別府一万年山断層と言われていて、今は中央構造線断層帯のうちの一部区間ということになっていますが、その真上に県庁も市役所もあるんですね。そういった状況ですので、揺れとしては、南海トラフの地震よりもそういった活断層で起きる地震の方が、直上、断層の上、近傍でははるかに強い揺れになると思いますので、それへの警戒は怠ってはならないというふうに私は考えておりますので、是非是非活断層の方も気にしていただければなと思います。

福崎委員 素朴な質問で申し訳ないんですが、こういうプレートで起きる、海底で起きる地震

は横揺れなのかな、さっき言った活断層とかいう内陸のは縦揺れ地震なのかなという感じがするんですが、実際、縦揺れ地震と横揺れ地震とよくあるんですけど、それってどういう地震か教えていただけたらと思うんですが。

吉見主任研究員 実際には、縦揺れ地震、横揺れ地震というのは、そういう区分けはないんです。

ただ、縦揺れを強く感じる、直下地震のときに突き上げるような揺れを強く感じるというのは、それは正にそのとおりでして、震源が近いと、まずは、ちょっと難しいんですが、震源から直接やってくる波が多いです。

横揺れ地震だとか遠くで起きた地震でゆらゆら揺れるというのは、あれは震源から直接来る波もちろんあるんですけども、来た後に、いろいろ地表面で跳ね返ったりとか、そういった後続波、続いてくる後続する波とか表面波とかいうんですけど、そういったゆらゆら成分の多く発達した波を感じる。それは縦揺れがないんですね。基本、横揺れしかしないので、ゆらゆら揺れるように感じる。実際、そういうふうに揺れている。

ただ、震源のすぐ上の場合は、震源から来る波も、基本的に言うと、主要動、S波も上向いたりしているんですね。ですから、何か斜めに突き上げられたような動きを感じることも多いと。

ただ、家の被害とか、山はちょっと分かりませんが、少なくとも家とか構造物の被害を見ると、縦揺れの影響というのは余りなくて、ほとんど、直下型地震でもほぼ横揺れで壊れている。ただ、人間の感覚で、座ったり立ったりしていると、人間の体って縦揺れの方を感じるんです。横揺れは、人間は横揺れを止める装置がないので、自分で戻すしかないんですけど、縦揺れというのはどうしても物理的に揺れてしまうので、怖く感じるということも相まって、直下型地震のときは縦揺れが強くてびっくりしたというような話がよく出てくるものだとは私は認識しております。

御手洗（吉）委員長 ほかはよろしいですか。

〔「なし」と言う者あり〕

御手洗（吉）委員長 委員外議員もいないですか。

〔「なし」と言う者あり〕

御手洗（吉）委員長 ほかに発言もないようですので、参考人からの意見聴取については終わりにしたいと思います。

吉見主任研究員におかれては、大変貴重で示唆に富んだお話を賜り、誠にありがとうございました。

いただいた御意見は今後の議論の参考にさせていただきます。

〔吉見主任研究員退室〕

御手洗（吉）委員長 それでは、次第3その他ですが、この際、この場で共有したいことがあれば、御発言をお願いします。

〔「なし」と言う者あり〕

御手洗（吉）委員長 特にないようですので、これで終わりにしたいと思います。

委員外議員の皆さん、お疲れ様でした。

記者の方々や傍聴席の皆さんにおかれては、御退席をお願いします。

委員の皆様は、内部協議を行いますので、このままお待ちください。

〔委員外議員、記者、傍聴者退室〕

御手洗（吉）委員長 それでは、内部協議を行います。最初に今後の開催計画について、事務局から説明をお願いします。

事務局 それでは、今後の開催計画について、説明します。

内部協議用資料1ページを御覧ください。

次回の第4回委員会は、2月17日の1週間前議会運営委員会開催予定日に開催し、執行部から取組状況について、説明を受けたいと考えています。

1月19日に開催予定でしたが、延期となりました防災局、生活環境部と福祉保健部、それに土木建築部を加えて一緒に説明を受けたいと考えています。

2月であれば、今回の大分市佐賀関の大規模火災の対応も含めて説明を受けられるものと思われる。

そして、次の日の2月18日から20日に、

県外所管事務調査を計画しています。詳細な行程については、後ほど説明させていただきます。

次の第5回委員会は、令和8年第1回定例会中、3月10日の本会議終了後に、2回目参考人招致を考えています。

その参考人招致については、資料2ページを御覧ください。

参考人として、立教大学大学院の長坂俊成教授と、レスキュー・サポート九州の木ノ下勝矢理事をお呼びして、避難生活等の災害復旧・復興について説明を受けたいと考えています。

今年度につきましては、以上のとおり、参考人招致、執行部説明と県外所管事務調査等により調査研究を進め、来年度には政策提言に向けた議論を始めたいと思っています。

御手洗（吉）委員長 それでは、説明のあった今後の開催計画について、御意見はありませんか。

原田委員 第4回委員会の開催時間を教えて欲しい。

事務局 午前中を予定していますが、他の行事日程と調整したいと思います。何もなければ午前中をお願いしたいと考えています。

御手洗（吉）委員長 ほかに、いいですか。

〔「なし」と言う者あり〕

御手洗（吉）委員長 次に、県外所管事務調査について、事務局から説明をお願いします。

事務局 それでは、県外所管事務調査について説明します。

前回の第2回委員会において、県外所管事務調査の日程・視察先については、委員長・副委員長に御一任をいただいたところですが、先日、日程調整のアンケートを行いまして、委員長、副委員長と協議し、最も多くの参加が見込まれる令和8年2月18日から20日の2泊3日で実施したいと計画しています。

具体的な行程については、資料3ページを御覧ください。

前回の委員会でお話ししたとおり、輪島市を中心に視察したいと考えています。初日の18日は、飛行機で東京へ移動し、午後から政策研究大学院大学の西垣特任教授への訪問を計画し

ています。

西垣特任教授は、能登半島地震時に石川県副知事として、震災時の災害対応の陣頭指揮をされた方であり、当時の石川県の取組等、貴重なお話をお聞きしたいと考えています。

その後新幹線で金沢市まで移動し、初日は金沢市で宿泊を予定しています。

2日目の19日は、金沢市内のホテルから借上バスで、輪島市まで移動し、移動途中にも、地震被害の大きかった門前海岸や、とうげマルシェを立ち上げて復興に取り組む門前地区を視察しながら、輪島市内に入る予定です。

午後は、震災の情報発信拠点となっている復興デザインセンターで、震災時の状況や復興の様子等を地元の方からお聞きし、その後輪島朝市通りの火災被害からの復旧状況や応急仮設住宅等を視察し、その日は輪島市での宿泊となります。

3日目の20日は、大分県への帰路となりますが、最寄りの能登空港より、羽田経由の飛行機で、帰ってくる計画です。

早速、飛行機やホテル等の手配をさせていただきたいと思いますので、よろしければ、お手元に行程のアンケート表をお配りしていますので、12月5日までに回答いただきますようお願いいたします。説明は、以上です。

御手洗（吉）委員長 それでは、説明のあった県外所管事務調査について、御意見はありませんか。

〔「なし」と言う者あり〕

御手洗（吉）委員長 それでは、2月18日から20日にかけて石川県輪島市等を視察することに決定します。

詳細は委員長に一任いただきたいと思いますので、よろしく申し上げます。

最後に、全体を通して何か質問等はありませんか。

〔「なし」と言う者あり〕

御手洗（吉）委員長 それでは、以上で本日の委員会を終わります。

次回の委員会は、2月17日に開催し、時間は後日通知しますので、よろしく申し上げます。

お疲れ様でした。